

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：32618

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00717

研究課題名（和文）VAシャドーイング法の知見に基づいた発達段階に対応できる日本語指導モデルの開発

研究課題名（英文）Development of Japanese Instruction Models Tailored to Developmental Stages Based on Insights from the VA Shadowing Method

研究代表者

中山 誠一（Nakayama, Tomokazu）

実践女子大学・文学部・教授

研究者番号：10552763

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、日本語を第二言語とする児童・生徒を対象に、漢字の「読み方」の学習を促進するだけでなく、日本語の文章理解力を向上させる新しいVA シャドーイング法を検証し、発達段階に応じた合理的かつ効果的な日本語指導モデルを開発することであった。その結果、漢字の「読み方」の学習について、従来のVAシャドーイング法は、青年前期の学習者のみに効果があることが判明した。児童期の学習者に対しては、課題の既有知識を活性化させた後にVAシャドーイングを行うと効果があることが明らかになった。しかしながら、開発したVAシャドーイング法が、日本語の文章理解力を向上させるかに関する検証には辿り着くことができなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的・社会的意義は以下の通りである。先行研究では明らかになっていなかった、課題に対する既有知識の活性化が漢字の「読み方」の学習を促進する可能性があるという新たな知見を得た。本研究の調査対象は英語を母国語としている日本語の初学者であり、漢字の「読み方」の学習を促進するほどの日本語（特に漢字）に関する既有知識を豊富に持ち合わせているとは考えにくい。母語（英語）による既有知識がどのように漢字の「読み方」の学習に貢献しているのか、あるいは、別の要因なのかは定かではないが、この点を明らかにできると、非漢字圏の日本語学習者に対するより効果的な漢字学習法を開発できる可能性があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to validate a new VA shadowing method aimed at improving not only the reading of kanji characters but also the comprehension of Japanese sentences among children and students learning Japanese as a second language. As a result, it was found that the traditional VA shadowing method was effective only for learners in their early youth in terms of learning how to read kanji characters. For children learners, it was revealed that conducting VA shadowing after activating existing knowledge related to the task was effective. However, it was not possible to reach a conclusion regarding whether the developed VA shadowing method contributes to enhancing the comprehension of Japanese sentences.

研究分野：学習開発学

キーワード：漢字の読み方 VAシャドーイング 文章理解 理科 読み物

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の目的は、日本語を第二言語とする児童・生徒を対象に、漢字の「読み方」の学習を促進するだけでなく、日本語の文章理解力を向上させる新しい VA シャドーイング法を検証し、発達段階に応じた合理的かつ効果的な日本語指導モデルを開発することにあった。近年日本では日本語を第二言語とし、日本語力が発達段階に追いついていない児童・生徒数が急増しており、こうした児童・生徒に対して、漢字の「読み方」の学習を効果的に進め、日本語の文章理解力をいかに高めていくかが喫緊の課題となっている。この課題について、我々はこれまでに漢字の「読み方」の学習に対し「音声」と関連づけて学習を促進する VA シャドーイング法を開発し、漢字圏・非漢字圏の日本語学習者を対象に、その効果を実証的研究により明らかにしてきた。しかしながら、日本語の習得においては漢字の「読み方」の学習効果を、文章理解力育成に関連づけることが必要であるが、先行研究には、こうした研究は見当たらない。

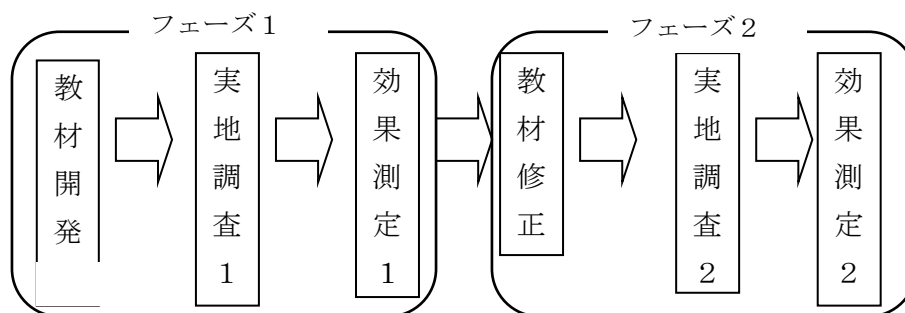
日本語の漢字には音読みと訓読みがあり、その読み方を文脈によって判断しなくてはならない。VA シャドーイング法とは、文章についてビジュアル・シャドーイング（パソコンを活用し指定された時間で音読すること）と音声シャドーイング（呈示される音声を即座に口頭で繰り返すこと）を交互に行うことで、文脈の中で漢字と音声を関連づけ、漢字の「読み方」の学習を促進する方法として、その効果についての実証的研究が進められてきた。

### 2. 研究の目的

先行研究では、英語教育の分野における VA シャドーイング法の聴解力向上に対する効果について、より詳細な分析を行うために Kintsch らの状況モデルに基づいた文章理解力テストを開発し、学習者の文章理解力を3段階（表層・命題・状況モデル）で測定した（中山・森, 2012）。その結果、VA シャドーイング法は、従来のシャドーイング法と比較して、文章理解の最も高次のレベルである状況モデルの構築（文章全体の理解）を促進することが明らかになった。しかしながら、日本語教育の分野では、VA シャドーイング法が同様の効果をもたらすかどうかについては未だ検討されていない。そこで本研究では、先行研究（中山・森, 2012）を参考に、漢字の「読み方」の学習を促進するだけでなく、日本語の文章理解力を向上させる新しい VA シャドーイング法を検証し、発達段階に応じた合理的かつ効果的な日本語指導モデルを開発することにある。

### 3. 研究の方法

VA シャドーイング法を活用した発達段階に対応する妥当性・信頼性の高い日本語指導モデルを開発する。具体的には、各学齢期で学ぶ理科分野に関する VA シャドーイング法教材と、その効果や日本語の文章理解力を測定する読解・聴解テストを、先行研究（中山・森, 2012）を参考に開発し、下の図のとおり実地調査・効果測定・教材修正を繰り返し、より信頼性の高い日本語指導モデルを開発する。文部科学省が示す発達段階の特徴を参考に、本研究の調査対象を学童前期（小学校低学年）、学童後期（小学校高学年）、青年前期（中学校1・2年生）の3つのグループに分割し、年度ごとに調査対象を定め、VA シャドーイング法教材およびテストの開発・実地調査・統計的分析による効果測定を行い、発達段階に適した日本語指導モデルを開発する。さらに、2020年度と2022年度には、それまでに開発したそれぞれの日本語指導モデルについて、専門家による検証や統計的分析をさらに進め、その妥当性と信頼性を再検証し、発達段階全体を見通した日本語指導モデルとは何かを明らかにする。



#### 4. 研究成果

研究の方法で述べた2つのフェーズに分けて研究成果を報告する。

(1) フェーズ1 (2018年度から2019年度) で得られた成果は以下の通りである。

当初は、文部科学省が示す発達段階の特徴を参考に、本研究の調査対象を学童期前期(小学校低学年)に定め、VA シャドーイング法教材を作成する予定であった。しかしながら、従来大学生を対象に実証研究を進めてきたVA シャドーイング法が、発達段階にある学習者に適切であるかを検証する必要があったため、その検証と分析を実施し、結果について学会発表を行った。具体的には、第二言語として日本語を学ぶ学童期前期から青年前期の学習者に対して、VA シャドーイング法が漢字の「読み方」の学習をより効果的に促進できるかどうかを調査した。漢字の学習には意味、表記、発音の三つの側面が関わる。日本語学習者は、表意文字(漢字)と二種類の音節文字(ひらがなとカタカナ)の三種類の表記文字を学ばなければならない。さらに、漢字の発音は文脈によって異なるため、学習者は一つの漢字文字に複数の発音を覚えなければならない。この研究では、大学生を対象とした先行研究に基づいて、漢字の「読み方」の学習に対して、VA シャドーイング法とVV シャドーイング法について、より効果的に学習する条件はどちらかを比較検討した。VA シャドーイング法では、漢字と音声で示される読み方を口頭で繰り返す学習法である一方、VV シャドーイング法は、漢字と文字(ひらがな)で示された読み方を口頭で繰り返す学習法である。その結果、従来のVA シャドーイング法は青年前期(日本語学習歴が長い)にのみ効果があることが判明した。この結果を受けて、研究計画を見直し、学童期に効果的なVA シャドーイング法開発に着手することにした。その第一段階として、学童期前期から学童期後期の児童を対象とした、理科に関する日本語VA シャドーイング教材(全162種類)を作成した。

(2) フェーズ2 (2020年度から2023年度) で得られた成果について述べる。

本来であれば、2020年度及び2021年度は、フェーズ1で作成した学童期の児童を対象とした、理科に関するVA シャドーイング教材(全162種類)を用いて、新しいVA シャドーイング法開発に着手する予定であった。しかしながら、コロナ禍の影響により、現地調査を見送った。そこで、期間を1年延長し、2022年度および最終年度(2023年度)に、開発した日本語VA シャドーイング教材について学童期の児童を対象とした調査を2023年9月と3月にそれぞれ実施することができた。その結果、従来のVA シャドーイング法に加え、視覚的教材等による読み物に関する既有知識の活性化を行うと、漢字の「読み方」の学習が促進される可能性があることが示唆された。

本研究に関する研究成果のまとめと考察を以下に述べる。第一に、大きな成果は、VA シャドーイング法について、漢字の「読み方」の学習に対する効果が、大学生を対象とした先行研究とは異なる結果を得たことである。当初の見通しでは、VA シャドーイング法は、学童期それも特に学童期前期の児童に効果的だろうと予測していた。学童期前期の児童は、文字という概念を体系的に学び始めたばかりの時期である。幼少期に音声を通じて言語を修得してきた学童期前期の児童にとっては、習いたての文字(ひらがな)を介して漢字の「読み方」を学習するより、音声と直接結びつけた方が、学習効果を期待できるであろうと予測していた。しかしながら、VA シャドーイング法が効果を発揮したのは、青年前期の生徒であった。青年前期の生徒と学童期の児童の違いは、大きく分けて2つある。一つ目は、青年前期の生徒は、学童期の児童と比較して、日本語学習歴が長い分、日本語の聴解力が高い。二つ目は、青年前期の生徒は、学童期の児童と比較して、認知力が高くまた、全ての事柄についての既有知識をより多く持っているということである。学童期の児童の聴解力を青年前期の生徒に近づけるためには、莫大な時間がかかる。そこで、本研究では、2つ目の違いに着目して、VA シャドーイング法に加え、既有知識を活性化し、読み物の内容理解を促進させるための工夫を行うことにした。具体的には、既に母語で習った内容(理科)について書かれた読み物を選択し、さらに、VA シャドーイング法を行う前後に、図などの視覚的教材を交えた10分程度の読み聞かせを実施することにした。その結果、VA シャドーイング法を実施する前後に既有知識を活性化させた条件と、そうでない条件とでは、前述の条件の方が、漢字の「読み方」の学習を促進する可能性があることがわかった。

本研究の最終目標は、漢字の「読み方」の学習を促進するだけでなく、日本語の文章理解力を向上させる新しいVA シャドーイング法を検証し、発達段階に応じた合理的かつ効果的な日本語指導モデルを開発することであった。漢字の「読み方」の学習を促進するという点では学童期から青年期を見通した指導法を開発できたといえる。しかしながら、開発した指導法が、日本語の文章理解力を向上させるかどうかについての検討までは到達できなかった。今後の課題としては、まず、開発したVA シャドーイング法が、文章全体の理解を深めているのかを検討する必要がある。そのためには、本研究で作成したVA シャドーイング用教材や、Kintschらの状況モデルに基づいた文章理解力テストを喫緊に開発し実証する必要がある。

また、先行研究では明らかになっていなかった、課題に対する既有知識の活性化が漢字の「読み方」の学習を促進する可能性があるという新たな知見を得た。しかしながら、本研究では、課題に対する既有知識の活性化がなぜ漢字の「読み方」の学習を促進するのかというメカニズムについて解明することができなかった。本研究の調査対象は英語を母国語としている日本語の初学者であり、漢字の「読み方」の学習を促進するほどの日本語(特に漢字)に関する既有知識を豊富に持ち合わせているとは考えにくい。母語(英語)による既有知識がどのように漢字の「読み方」の学習に貢献しているのかあるいは、別の要因なのかは定かではないが、この点を明らか

にできると、非漢字圏の日本語学習者に対するより効果的な漢字学習法を開発できる可能性がある  
あると考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 NAKAYAMA Tomokazu, FURUYA Emiko	4. 巻 10
2. 論文標題 Facilitating Kanji Pronunciation Learning in K-8 Immersion Education	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 実践女子大学 CLEIPジャーナル	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 NAKAYAMA, Tomokazu	4. 巻 63 (1)
2. 論文標題 Effectiveness of the Visual-Auditory Shadowing Method on Learning the Pronunciation of Kanji	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Japanese Psychological Research	6. 最初と最後の頁 26-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/jpr.12278	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 NAKAYAMA, Tomokazu	4. 巻 62
2. 論文標題 How can syntactic priming studies contribute to the second language acquisition theory?	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『実践女子大学文学部紀要』	6. 最初と最後の頁 31-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002139	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 NAKAYAMA, Tomokazu	4. 巻 6
2. 論文標題 Does the L1+ approach derived from syntactic priming research facilitate sentence production for Japanese English learners?	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 実践女子大学 CLEIPジャーナル	6. 最初と最後の頁 23-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002130	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 7件）

1. 発表者名 NAKAYAMA Tomokazu
2. 発表標題 Enhancing Kanji Pronunciation Acquisition in K-8 Immersion Education
3. 学会等名 The 1st International Joint Conference for Student Success (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 NAKAYAMA, Tomokazu
2. 発表標題 Is the VA Shadowing Method Effective on Pronunciation Learning of Kanji?
3. 学会等名 The 2022 9th International Conference on Education and Psychological Sciences(ICEPS 2022), January 29-31, 2022 in Nishinippon Institute of Technology, Kitakyushu, Fukuoka, Japan (Online) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 NAKAYAMA, Tomokazu
2. 発表標題 What is L1+Approach? -Its Mechanisms and Implications for Pedagogy
3. 学会等名 The 2021 8th International Conference on Education and Psychological Sciences(ICEPS 2021), January 29-31, 2021 in Nishinippon Institute of Technology, Kitakyushu, Fukuoka, Japan (Online) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 NAKAYAMA, Tomokazu
2. 発表標題 Does the L1+ approach based on findings in syntactic priming research promote sentence productions of Japanese English learners?
3. 学会等名 the 28th MELTA International Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 NAKAYAMA, Tomokazu
2. 発表標題 How can we explain the mechanisms of L2 learning based on priming research?
3. 学会等名 Conference on Education, Research and Innovation (ICERI 2019) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 NAKAYAMA, Tomokazu
2. 発表標題 L1+ Approachits mechanisms and efficacy for L2 instructions
3. 学会等名 The 7th International Conference on Education and Psychological Sciences(ICEPS 2020) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中山誠一
2. 発表標題 漢字の読み方の学習に VA シャドーイング法は効果を発揮するのか 小中学生を対象にして
3. 学会等名 日本教育心理学会第60回総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tomokazu Nakayama
2. 発表標題 Does VA Shadowing Method Really Facilitate Learning Pronunciation of Kanji?
3. 学会等名 2018 8th International Conference on Education, Research and Innovation (ICERI 2018) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	山内 博之  (Yamauchi Hiroyuki)  (20252942)	実践女子大学・文学部・教授   (32618)	
研究 分担者	寺本 貴啓  (Teramoto Takahiro)  (50585114)	國學院大學・人間開発学部・教授   (32614)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------